

# 七十九年史

## 年表で読む 古平の歴史

《108》

発行・古平町史編さん室  
文化会館 842-12590  
第203号・平成18・8・1

山林の保護に当つていた。  
明治四年、開拓使古平出張所  
では、林地や開墾地について次の  
ように調査していた。

ピリカナイ沢 = トドマツ角材  
ホロナイ沢 = トドマツ角材  
リリコマナイ = 雜木・トドマツ  
ドロノキ沢 (泥の木沢) =

イタヤ・セン・ナラ・トド  
マツ少々

ポンススキナイ = 雜木・トドマツ  
ツ少々

ススキナイ = 雜木・トドマツ  
少々

バンノ沢 (番の沢) = シナ・ナ  
ラ・セン・トドマツ少々

カツラノ沢 (桂の沢) = シナ・ナ  
ラ・イタヤ

カモイギ (鴨居木) = 雜木・ト  
ドマツ少々

山に入つて伐採するには認可が  
必要で、下のような認可書が残  
されている。

右伐木願御聞届候事  
明治七年 正副戸長 印  
第一月廿一日 記  
願人 富本甚内殿

余市派出所が設置され、古平郡  
道路の立岩の辺りから入つた沢  
は雜木多くトドマツ少々、沖村  
ラルマキ沢は雜木多分、などと  
変わつたが、少ない用材の伐採願  
いは古平郡長の権限で許可してい  
た。

◇漁業とのかかわり  
古平の林業は漁業との関連  
が深かつた。松前藩時代には岡田  
家の請負場所であり、当時の古  
平一帯の山地は広葉樹林に広く  
覆われていたが、漁場の經營によ  
つて建築資材、漁場の構築用、納  
屋などの用材の外、魚粕製造用  
や越年用としての薪の需要が急  
激に増えたことにより、近くの山  
は盛んに伐採された。

これによつて、山は早くから漁  
場で働く人達の野菜など自給の  
ための農耕地となつたり、住宅地  
や干場として利用されたりして  
いた。

### ◇ 森林の保護

明治初年、開拓使は森林保護  
条例を制定し、山林監守がいて

明治一四年頃、余市に地理課  
明治一四年頃、余市に地理課

→ 雜木など伐木認可証

## ▼三月三一日

天気快晴、昨日来の吹雪も収まつた。月末だが入金も無く、店もいたつて閑散だ。普選法もいよいよ貴族院を通過した。本間弥一郎さん佐渡から来られ、夜、佐渡の話をいろいろとする。夜になって建網、刺網共に建て揃う。時代後なのでひとり漁あらん。

## ▼四月一日

起床四時半、今日は祝聖会例会日、洗面後早々に五時出かける。

最早春、暖かくなつたので水での洗面もさほど辛くない。四時半頃から東の空がだんだん白み薄明になると。和尚は内地に出張不在のため、僧侶一人だけだ。八名が出席した。この朝、入船町岬で漁があり、種金二杯を筆頭に①一二三杯、八半杯、その他少々、刺網は五、六モツ」とのこと。浜中、沢江、沖村方では皆無だ。余市はかなり漁あり、総収穫二〇〇〇余石の由、近郊の一等漁、美國は一二三杯獲つたところもある由、今日は寒暖計も四六度F(七・八度C)、本当の春

景色になつた。高太郎さん午前一時頃、**本**のサキリなどを積んだ船に乗り、入舸の若林へ行つた。

一時頃、ソノさんの叔父、函館の**田**岩崎主人が危篤と電話があり、午後の船で急いで函館へ向かう。

午後五時頃浜へ出で見る。上ナギ、明日は良いだろう。

## ▼四月二日

起床五時半、歌棄山中方面漁あり、△一五、六杯、凶一〇杯、○

## 高野名幸作さんの日記から

(114)

## 當時の世相を見よ。

宇方面思わしからず、今のところ古平はよい方だ。

## ▼四月三日

起床六時、練漁は歌棄方面がよろしい。一〇杯を上とし以下二杯

くらい、前浜だけは皆無、刺網は今日もかなり掛かる、昨日、今日は二〇本以上、今まで三、四〇本も獲つた。これで刺網は半漁をし、

昨年以上の漁をしたことになる。

この分だと今年は刺網大漁になるだ

も獲つた。小樽岡崎姉さん、さよちゃんの女子大卒業式参列を兼ねて、京都方面の見物で去る二三日出発されたとのこと。今日、東京から手紙が来る。幸治は日増しに良くなり、今日は皆と一緒に七時頃に起きた。

## ▼四月五日

練漁は今朝、歌棄山中方面、△、○、命、凶、今など四、五杯か

ら一〇杯ぐらいまで、刺網は薄掛かりで五本から一〇本ぐらい、チラチラ雪が降り、寒いこと寒中の如

ら、熊さんは中へ行つたが、生売りしたと練割きをやり帰る。練はしばれて棒のようになつていると、

こんなこと、近年にないことだ。夜

幸治も今日は氣分が良いと起きている。思ひ起こせば昨年の今日は、自分が佐渡を出発した日だ、あれ

から早一年が過ぎたのだ。本日まし九時帰る。

## ▼四月六日

朝から雪が降る。練漁皆無だ。夜の模様では今朝はきっとよいと思

起床六時、練漁さらになし。昨夜は静かでナギだったので、てつきり大漁ならんと思っていた。熊さんは三日も朝早く出たのに、まだ一日もモツコしよいがない。朝からチラチラ雪が降り出し、寒風が吹く。積丹はさらに漁がないとのこと。**本**、若林など獲らせたいものだ。小樽岡崎姉さん、さよちゃんの女子大卒業式参列を兼ねて、京都方面の見物で去る二三日出発されたとのこと。今日、東京から手紙が来る。幸治は日増しに良くなり、今日は皆と一緒に七時頃に起きた。

つていたがガツカリした。古平は今まで累計建網三、〇〇〇石、刺網二、五〇〇石、合計五、五〇〇石ぐらいならん。今どろ余市八、〇〇〇石、美國四、〇〇〇石。外は少々、古宇、岩内、積丹は皆無だ。この日一〇時頃の話に、積丹余別から入舸まで、昨夜の大時化で大抵のところ網を流失したとのこと、因でも一杵獲つたが、時化で持ち切れずに投げたとは実に残念だ。若林さんは三つ獲つたというが、無事に揚げられればよいが。

## ▼四月七日

この頃は毎朝就寝中にも、漁の模様如何とそればかり考えている。大漁だと聞けば起きる張り合いがあるが、獲らぬと聞けば起きる気がしない。今日も沖村、歌葉方面はあちこち五杯から八杯獲つたところ一度にドツサリ獲れぬ。ひと朝に一万石も獲れるようなことがあってほしい。今朝、熊さんは△に行く。幸治は明日から学校が始まるので今朝の船で行く。子供達もケンカ相手がいなくなつてさびしい。この間中風邪で七日も休んだが、幸い回復してよかつた。妻とコノさ

んはヨヘ練割きの手伝い、家に残つた私とユキちゃん、ヨシ、トミ、四郎、父と昼夜食、普段は多人数なので、今日はずい分と小勢であった。父と吉治は建網の陸揚げしてるところから、モッコほども拾つて来る。七時頃、妻とコノさんが帰つて来た。

## ▼四月八日

起床七時、練漁、沖村から前浜まで一帯に薄漁、多きは一〇杯ぐらいから五杯ぐらいまで、刺網は薄い掛かりだ。前浜では力、半歩方、田岸、因など二、三杯あて獲れた、初漁だ。港町、入船町、前浜は本日まで皆無、小林、野村などは無い。本年は入船町方面が割合獲れぬ。因、久などでも二、三杯しか獲れぬとのことだ。刺網は今日も七本から一〇本ぐらい、本日まで七、〇〇〇石ぐらいあるだろう。夕方浜へ出で見たが上ナギ、

十六夜の月がこうこうとしていて、本当に獲れそうな夜だ、一夜に一今朝、そと起きてみれば、またも万石ぐらいの大漁がありそうだ。明日こそ良いだろう。余市は五、六、七日と大漁、本日まで三万五千石、岩宇方面は皆無、全道で七万石の半漁は余市だ。

## ▼四月九日

昨夜の模様では、今朝こそ大漁ならんと楽しみにして休んでいたが、四時頃からガヤガヤとモッコしよが通る。四時半に文治が起きて浜へ行つて見たが、さほど獲れないと言つて帰つて来る。昨夜こそ思つてゐたのにガツカリ。六時頃まで休む。沖村方面少々獲れ、〇一〇杯、△、崎長少々獲れたとのこと。

その他は皆無だ。余市などは三万石以上も獲れたというのに、古平は大々漁が無い。一二、三日までによれば七日夜、朝里、熊碓方面は大漁、五千石以上とのこと、古平はどうしたことか。熊さん〇へモッコしよ、妻とコノさんはヨヘ練割きに行く、家はユキちゃんと子供達ばかり。天気快晴、上ナギ、こんなときに大漁、沖揚げしたらどんなによいだろう。

## ▼四月十日

昨夜の様子では、今朝こそ大々漁ならんと期待していたので五時頃起床、早速、浜へ出て見る。意外にも昨夜の騒ぎばかりが大きくて、前浜、川尻から沖村まで多きは一〇杯ぐらい、少ないところで一杯ぐらいだ。刺網四、五本も獲れた。私は買い練をするのであちこち歩き、沢江の△の方まで行く。改良式蒸氣巻揚機を見たが、ずい分進歩している。沖は発動機船やらで賑やか。熊さん、コノさんは〇行き。私と妻は練割きをやる。午後四時頃、平さんの骨折りで買い練三反型川崎船一隻に積んで来る、上練だ。(力)浜へ揚げる、なかなか忙しい。七時半頃ようやく終わる。

漁、塩谷も一昨夜は一万石も獲つたとのこと。今のところ岩宇は皆無を除き、積丹、美國、古平は負けている。今朝、コノさんはヨヘ練割きに行く。熊さんは家で練つぶし、私は練割きとしりつなぎ、近来にない運動であった。良い天気で雪も消え運動であつた。夜は静かなよい夜、今夜こそ大漁ならんことを祈る。

たとのこと。今のところ岩宇は皆無を除き、積丹、美國、古平は負けている。今朝、コノさんはヨヘ練割きならんと楽しみにして休んでいたが、いる。今朝、コノさんはヨヘ練割き三反型川崎船一隻に積んで来る、上練だ。(力)浜へ揚げる、なかなか忙しい。七時半頃ようやく終わる。

一本八円とのこと。夜に入り風が

止む。ダシ風が強く吹き、気温が五〇度下まで上がる。雪の消える」と甚だしい。

▼四月一二日

起床五時半、今朝も歌棄山中より川尻まで中漁あり、多きは一三杯から五杯くらいだ。沢江、浜中方面は皆沖揚げに賑やかなことだ。刺網は歌棄山中が群来たとて、沢江、浜中方面はケラ掛かりで五本から一〇本揚げる。約二、五〇〇石、累計一万六、七千石ならん。天氣よし、暖かく浜は練で戦場の如し。実に賑やかなことだ。昨日買った鯨婦、私等夫婦の六人で一三本つぶす、上等な練だ。數の子、白子も多い、七時頃終わる。ずい分疲れた。八時頃から浜一帯が練模様で賑やかだ。今夜こそよいよ一万石獲りたいものだ。父は今朝、三穂丸で小樽に上陸したと岡崎から電話がくる、突然で驚いた。美國は昨夜、一昨夜と大漁、累計二万石余りの由、古平は一番負けた。

▼四月一三日

練大漁、今朝の収穫一万一千石、累計三万石に達した。これで大漁になつた。昨夜來の練模様、今朝に

なつて入船町岬から沖村方面まで残らず大漁。多きは一桟、前浜から港町港内一〇杯くらいを最低とす。平均二〇〇石で一万石、刺網は一、三〇本で二千石、浜は上ナギ、天氣も良く暖かく、實に良い日だ。

▲、○では大漁手ぬいが出た。沖の桟三〇余りに大漁旗が立ち、一夜で人気が一変して引き立つ。発動機船は桟引き、汲み船引き。刺網は真っ白に掛かったのを

沖揚げ、実に見事だ。父は午後二時、富丸で無事帰宅された。二ヶ月余りの旅行で何ら変わりなく安心した。私等は家内中と平さん等で力場所で練つぶし、七時頃から雨が降り出し時化模様、今日の漁、まだ半分より陸揚げしてないので桟を港内に入れている。

▼四月一五日

一四日から時化もだんだんナギてきた。熊さんは○で港町へ揚げ本陣の浜では△、神田、崎長などが沖揚げしている。私は家で午前中は練割き、午後から妻と中主人、コノさん、ソイさんらは裏の買い練の身欠きができる。夜は保木の脇から肥料にする白子、缶目を困の横まで運んだが、道路が悪く暗いのでなかなかゆるくない。九時までかかる。労働で金もうけはなかなかゆるくないものだ。

▼四月一四日

昨夜七時頃から雨に風を交えて荒れ模様になつたが、一時頃からますます激しくなり、今朝起きて浜へ出で見ると、桟は港内に三〇余りもかかつてゐるが、古平の湾内は良港だけに大丈夫だ。五千石以上もまだ沖揚げしていないのがあるのだ。ナギで無事に沖揚げさせたいもの。美国久末から七号四反、△

からロープ一丸買いに来る。聞けば美國では今日の時化で、港内の桟四〇余りがこわれ、一万石の練を流失、漁夫も一人溺死したとのこと。余別、余市などでも桟が流失したという。古平は安全で良かった。

熊さん、コノさん、妻等は伞さんと買い練の練割き、夜に入つて風が少しないできた。

▼四月一七日

起床六時、昨夜の模様では時化後、漁があるかと思つたが聞けば皆無とのこと。しかし、これだけ獲つておけばさして困ることはないだろう。来てくればそれほど良いことではないが。珍しく天氣快晴、熊さん、コノさんらは○へ練割きに行く。私は妻と練割き、缶目干などを

今日は近頃にないよい天氣だ。あまり暑いのでシャツだけになつていて、店はツナギツラ、すだれなどが売られている。第一期全道漁況が出ていたところで遊んでいる。

時化模様もようやくおさまり、港内の桟もそれ前浜に引いて来て沖揚げしている。他の郡ではこの時代で皆投げたという。古平は

良港のため五千石が助かつた。建網もナギになつたので皆建て揃つた。今夜は時化のあとひと漁あるかもしれぬ。私は店で父の旅行中の札状を一〇余通と、大阪、小樽、その他漁況報告の手紙などを書く。妻はヨノさん、ソイさん、虫主人らと買い練割きをする。一段落したようだ。

起床六時、熊さん、コノさんは○へ練割きに行く。練漁は歌葉方面が少々、△、○、□は二杯から六杯、八〇〇石ぐらいは獲れた、美國は皆無。伞さんが来て、買い練の数の子の水を替える。私はシリツナギを切る。ソイさん、ユキちゃんは練つぶし役だ。午後から、妻はソイさんと力へ練割きに行く。私は数の子を水から上げ干したり、そのほか何かと忙しい。烟をを○さんに貸す約束をしたところ、今日、種金から今年も貸してもらいたいときたが断つた。美国から八尺を引いて来る船がたくさんいる。

## ▼四月一九日

起床五時、練漁はさらに無い。これからもよいところが一回ぐらいいはりそうなものだ。浜も先日来の活気がない。皆練つぶし、練割きなどに一生懸命だ。コノさんは、ソイさんは○へ練割きに行く。熊さんは足が痛いとて休んだが、家の練割きをやっている。今日は暑い」と、日中は六〇度F(約一六度C)まで上がる、シャツ一枚でもよいような天氣だ。

起<sup>6</sup>床六時、熊さん、コノさんは○へ練割きに行く。練漁は歌葉方面が少々、△、○、□は二杯から六杯、八〇〇石ぐらいは獲れた、美國は皆無。伞さんが来て、買い練の数の子の水を替える。私はシリツナギを切る。ソイさん、ユキちゃんは練つぶし役だ。午後から、妻はソイさんと力へ練割きに行く。私は数の子を水から上げ干したり、そのほか何かと忙しい。烟をを○さんに貸す約束をしたところ、今日、種金から今年も貸してもらいたいときたが断つた。美国から八尺を引いて来る船がたくさんいる。

## ▼四月二一日

起床五時半、練漁さらに無くさびしい。樺太、カムチャツカ方面出稼ぎボチボチある。一〇日ほど

前までは戦場のような忙しさであつたが、練漁の仕事は実にいつ時の間だ。伞おつかさんの葬式送りに行く。宝海寺への道路は雪解けの悪路だ。種田干場は買い練連中の納屋にずい分掛つている。まだ雪が一尺も残つているところがある。笛目など雪の上に積んでいる。父が佐渡へ旅行中、世話になつたところへ札状を書く。今日も数の子干しなどで忙しい。

## ▼四月二二日

起床六時、練漁が無くさびしい。

## ▼四月二三日

昨夜來の雨、今日も静かに降つて

新聞には宗谷、羽幌方面の漁況が出ている。これで練もいよいよ終漁ならん。古平近海は相当の漁なのでよしとするか。岩宇方面の皆無た。伞兄さんが来て数の子の水を替え、ムシロに広げる。ダシ風が強く砂を飛ばす。新聞によれば、増毛、天売、焼尻の漁に移つたようだ、八分どおり漁期は過ぎた。そろそろ樺太、カムチャツカ行きがある、今日も竹行李(たけごおり)が一個売れた。夜、伞おつかさんの通夜に行く。

▼四月二四日

起床五時半、練漁さらに無くさびしい。樺太、カムチャツカ方面出稼ぎボチボチある。一〇日ほど前までは戦場のような忙しさであつたが、練漁の仕事は実にいつ時の間だ。伞おつかさんの葬式送りに行く。宝海寺への道路は雪解けの悪路だ。種田干場は買い練連中の納屋にずい分掛つている。まだ雪が一尺も残つているところがある。笛目など雪の上に積んでいる。父が佐渡へ旅行中、世話になつたところへ札状を書く。今日も数の子干しなどで忙しい。

▼四月二五日

今日も曇天、数の子、笛目などムシロ干しができない。この頃割いた練は、この雨で落ちて日切れになつてゐる。この頃の雨は禁物だ。○では粒を烟に運搬するとして、家に場所を聞きに来たので知らせる。練

漁も、二十日前後に一回ぐらいいはりかも知れぬ。向かいの電気会社では少し負けたが、力があるから大丈夫だ。浜中、沢江方面の、今まで少なかつたところが獲れたので良しとしなければなるまい。所得税申告書を出す。

(続く)

▼四月二十六日

起床五時半、今日も練漁はさら

# 町内の学校訪問

沖町は、セタカムイ岬からローンク岬にかけて早くから鯨の干石場所として、また、沖町から歌葉町にかけての通称・山中（やまなか）一帯も鯨の好漁場として繁栄をもたらしていた。

安政年間この辺りを旅行した人の記録にも、「ラルマキ（沖町）へはメナシトナマリ（沢江）からの海岸は歩行が困難なので、沢を上がり崖の上に道路が開けている。従ってラルマキへは船で来るがすべて崖で、海中には奇石がそくそく。

## 沖尋常小学校

①

番屋の脇から南岸へ上がるにキコリ道があるが、奥は道が絶えていて、深い谷や木立をかき分けた上る。峠から下るとチャラセナイの滝の上に出る。」

沖町の地名はアイヌ語の『ラルマキ』が語源だといわれているが、アイヌ語辞典では『ワルマー』＝イチイ・ア「ワギ・方言オング」の生えているといふ。近頃はアイヌ語の古い地名を復活させようという声が挙がっているが、沖村川にかかる橋の名前は「ラルマキ橋」とある。町内の数ある橋で、片仮名で表記されているのはこの橋だけである。

### ◆ 沖町の概略

アイヌ語のラルマキから沖村と地名が変つてから、御木と書かれた記録もあつた。集落が古平本村から最も離れた沖の位置にあるというので、沖村と命名されたといわれている。これは、

余市郡の※沖村も、余市本村から遠く離れている」とからもうなづける。

※ 沖村（余市）＝現在は無いが古平郡の沖村に隣接していく、明治初年から同三十三年までの村名、同三十三年から昭和三十一年まで余市町の大字名であった。明治三四年、湯内村（現在の豊浜町）に沖尋常小学校が創設された。古平町の沖村とよく混同される。



→ 通称・「つ田の穴」以前あつたトンネルから見た沖村方面

小学校が創設された。

明治三五年、古平郡内の五町四村が合併して二級町村・古平町となつた」とから、大字沖村となつた。

すでに建網一三か統（一三個所）刺網二三〇放（網五枚で一放）はなし、同三二年には建網一九か統（うち一五か統が村内）、刺網九〇三放、漁獲高四、七五〇石（三五六三・ン）で郡内の約二割を占め、粕として製造され本州方面に移出された。

大正時代になると戸数・人口もさらに増え、漁業も最盛期を迎えた。同十五年には一六か統の建網で五、七〇〇石(四二七五トントン)の水揚げが記録されている。

また大正一二年、村内で五か統の漁場を經營していた田岸貞治が、ウインチ(動力は蒸気機関)による練沖揚げ法を導入して規模の拡大を図った。

しかし、昭和に入つてからの沿岸部の鮫不漁に見舞われ、同一二年、村内の建網九か統のうち七か統が合同漁業組に参加したが、会社は昭和一二年解散した。

昭和五〇年一月一日、現在の古平町大字沖町となる。同年から五三年にかけては第二次沿岸漁業構造改善事業として、中空三角ブロックの大型アワビ礁が地先に投入され、寿都町・大成町産のアワビ稚貝が放流された外、ウニの種苗も移植された。

昭和五四年から豊浜トンネルの直線化工事が始まり、同五九年、一一\*のトンネルが開通したが、平成八年二月、トンネルの崩落による大惨事が発生し、

その後、同一三年、沖町と豊浜町を結ぶ新しいトンネルが完成した。

六十番地居住右実父  
明治十八年十月七日  
八反田善助  
願之通  
沖学校御中

そして許可のあり次第、地目の変更を出願するつもりである。  
(文章は読み易いように表記を変えています)

### ◆ 沖学校の創立

明治一三年(一八八〇)八月一

明治十八年十月七日  
八反田善助  
願之通  
沖学校御中

とおり、校地、校舎共に買い受けたようである。

### 明治五年学制が公布されたが、北海道はようやく開拓が始まった地域である、という特殊な事情から、本州とは異なった学校制度が行われた。

明治一三年、建物を借り受けたような建坪五〇平方メートルほど(約一五坪)の建物を借り受けたものであった。その後、別の建物を借りて移転した。明治一五年には、児童数三八人(男子二六人・女子一一人)であった。学校長は置かず、諸橋源太郎が首座教員であった。

入学希望者は次のような入学願を提出し、許可を得て入学した。

明治一九年、北海道庁が設置されると、北海道だけの学校制度が府令で行われた。

明治一九年、北海道庁が設置されると、北海道だけの学校制度が府令で行われた。

明治一九年、北海道庁が設置されると、北海道だけの学校制度が府令で行われた。

### ◆ 沖小学校新築

明治一九年、建物を借り受けた。一学級であったが、校長の外に一名の教員が配置された。

その後も鮫の好漁から村内の人口も増え、それにともなって児童数も増加した。そのために校舎も狭くなり、一教室しかなくつたので校舎の増築を迫られたが、現在の校舎も古材を利用して建築したため、校舎そのものについても修理しなければならない状況であった。

明治一九年、北海道庁が設置されると、北海道だけの学校制度が府令で行われた。

明治一九年の沖学校について、原田家の古文書がある。

古平郡沖学校の敷地の件

古平郡沖学校については、もともと借地・借家であったが、昨十八年に家屋地所とも総代決議により購入した。しかし、その土地については海産物の干場であるので、土地を割つてもらうよう目下出願中である。

### 入学願

札幌県後志国古平郡沖村居住  
善助長女平民

八反田たか

明治十二(己卯)年八月生  
右御校へ入学爲支度此段奉願

候也

明治十八年十月七日  
札幌県平民後志国古平郡沖村



# 恥じらいの心

大澤文子



「ふつふつ」と朝の厨辺にほろ苦いコーヒーの香がたつ。テールの片隅には二つ折りのままの朝刊が無造作に載つてゐる。

匂いたつコーヒーを小さな力ップにそそぐ……と、私の一日がはじまる。

昨夜おそらくまでザラ半紙に走り書きしておいた原稿を清書しなければ……。だが気がかりのことが一つ、夏を迎へ一一番爽快な季なのに、歩きはじめる時の下肢の不快感は何故、ジーンと電波が走るがにだるい。

まあうん十年つきあつた脚ですものね、仕方がないか。もうこの辺で……と、だれかが何処かでつぶやく。なに！これしきのこと、ふと抵抗感が頭をもたげる。

匂いたつコーヒーの香が身のうちを過ぎる頃、ふーっと脚の萎えも忘れ、ことこと半熟卵も茹であがり、レモンジュース

をグラスに満たす……と私の朝食は終了。

そうそう今日は午後会合がひとつ、出席しなければ。夏日にむかい玄関先への打ち水も忘れられない。

また、宮本ナツさんのご厚意で小庭のをちこちにえぞ菊、金せん花、マリーゴールドの苗が植えられたが、見事に花開くを期待して水かけも忘れられない。いそぎ如雨露に汲み入れる水道水。

その時ふと思つた、数年前に読んだ新聞記事を。

『本州方面では特に猛暑が続いているので、「『水を大切に』のキャッチフレーズのもとに真剣にとりくんでいる。』……と、『水の日』が決められたのは「昭和五十二年八月一日」』

ということが載つていたのを記憶している。また九州の福岡に教師をして

いた姉からも、猛暑のつらさを書き綴つた手紙をもらつたことがあつた。薬缶一つだけを持ち朝刊が無造作に載つてゐる。大変……と、切ない思いで胸が痛が大変……と、電話で切実なやみを訴えていた姉を今でも思います……と、えつ何？きちんと

蛇口を閉めたはずなのに、かすかな音をたてて落ちはじめます……と、えつ何？きちんと

蛇口をギュッと閉める、そろそろ外出の支度を……と思つていつたが、またまた、いつか水道局が新聞にのせていた面白い記事を思い出した。

『あなたは水ことばをいくつ知つていますか？』

『うーん、頭の体操をこころみる資格もないがなア』

と思ったが、あの頃ちょうど帰省していた次男と真剣に考えたことがあつた。

「打ち水、水杯、水鏡、水もし

たたる、水いらす」

と終止符をうつたが、

「まだまだあるサア」

「背水の陣、水ごり、誘い水、水枯れ、水かけ論」等々。次男

書いた姉からも、猛暑のつらさを書き綴つた手紙をもらつたことがあつた。薬缶一つだけを持ち街はずれまで水を汲みにゆくのが大変……と、電話で切実なやみを訴えていた姉を今でも思います……と、えつ何？きちんと

地下鉄電車はすいていた。ふと前の座席に少女がひとり、十七、八歳くらいであろうか。幅真駒内から乗車する屋近くの窓外にうつる初夏の風景にひとき眼をうばわれていたが、やがてトンネルに入る。ふと前の座席の少女の動作に目をむけた。ゴソゴソと黒いバックからコンパクトをとりだすと、臆面もなくバタバタとファンデーションをぬりだした。

お化粧する時間もなかつたのかなア、もう二十分早く起床すればねえいいのに。出来上がつた顔は小生意気に見えた。バタバタと大通駅ひとつ前で下りていった。あの頃ちょうど帰省していた次男と真剣に考えたことがあつた。

何時までももつてほしい『恥じらいの心』は、だれのものでもない、ああ歌の文句ではないが……。

遠くへいつてしまつたのだろうか……。

本州地区稲倉石会

## 屋形船での隅田川下り

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

今年度の本州地区稲倉石会は内容をグレードアップし、屋形

船での夜の隅田川下りとしやれ込み、江戸の豪商達が好んだといふ風流を味わい、にわか大尽に接することとした。

屋形船は、在京の幹事さんが数か月前から貸し切り予約をとり、料理は活きのいい魚をその場で天ぷらにし、ビール・酒は飲み放題という、まさにお殿様か越後屋の主人にでもなつたかのよう、至れり尽くせりのお膳立をしてくれた。

今回は、会員のほかに東京近郊にお住いで、ご主人さんを亡くされた奥さんにも参加して頂き、更に、稻倉石鉱山がお世話をなつた東京本社の朋友の方々

も招待し、和氣あいあいの一夜となつた。

当日（五月二十四日）は、夕刻から、急に雲ゆきが怪しくなり、出航の時には、土砂降りと雷雨の手痛い歓迎を受けたもの、船内は料亭の一室と見違えるばかりに整えられ、雨も嵐もあり、雷も何のその、ゴロゴロ様の大音響や、周囲を白く染める稻妻も、私たちには隅田川の打ち上げ花火とさえ思える程の大満喫だった。

こうして大尽遊びの雰囲気が整つてゐるのに根は凡人の集まりの悲しさ、川辺の風情を愛でる風流心は薄く、専ら、飲む・喰う・ダベルのいつものパターに早変わり。

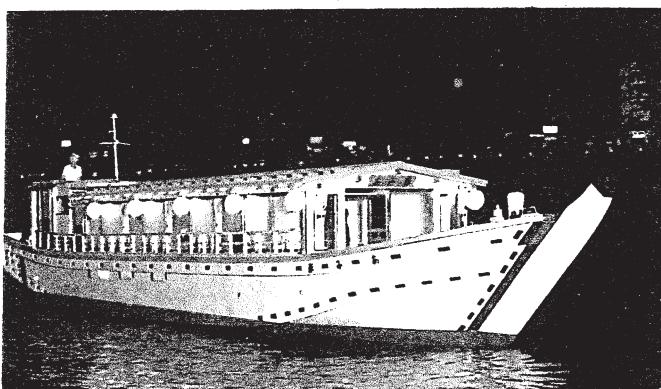
話題も、十数回の集まりで稻倉石での出来事は語り尽くしたのか、健康の事・趣味の事・家庭の事などが語られるようになつた。

今思うと、お目当てだつた両国橋・永代橋・勝鬨橋・浜離宮・レインボーブリッジも知らぬ間に通り過ぎ、お台場の夜景も眼中になく、風流人とは程遠い市井の町民に逆戻りとなつてしまつた。

こうして本年度の会合は、一日は雷雨を伴う超悪天・二日目は絶好の日本晴れと、両極端の大自然の中で、今も変わらぬ山男の友情と絆を確かめ、最後は、東京駅での別れの一献を交わし、家路の人となつた。

X X X

当日は、東京近郊の会員のほか、九州・岩手・宮城・山形・富山からも参加され、来年度は九州で開く事を申し合わせた。



またものの、『屋形船での隅田川下り』は、友達への自慢の種になる事だろう。不忍の池の辺りのホテルに着いた会員は、すぐさま車座になつての二次会を楽しみ、床についたのは誰もが午前様だつた。翌二十五日は、『はとバス』による東京名所めぐりの客となり、レインボーブリッジ・お台場・汐留シオサイト・六本木ヒルズなどを足早に観光し、特に六本木ヒルズの展望台からの眺めは絶景で、東京タワー・皇居・国會議事堂など、晴れ上がつた東京を、ぐるっと三百六十度を見下ろす事が出来た。

こうして本年度の会合は、一日は雷雨を伴う超悪天・二日目は絶好の日本晴れと、両極端の大自然の中で、今も変わらぬ山男の友情と絆を確かめ、最後は、東京駅での別れの一献を交わし、家路の人となつた。

## 老兵の綴り方

# あゝ韓太國境守備隊

橋 義 春 [遺稿]

八月十七日 [晴れ]  
逃避行を続け、八方山へ  
到達する ～ 続き

は食糧も弾薬も入手出来なくな  
る。真っ暗な八方山のタコつぼ  
の中で、これから一体どうなる  
のか、などと考えていたら急に  
自分が惨めになり、「どうにで  
もなれ」とばかりタコつぼの中  
でふて寝してしまった。

### 【戦況】

★この日のソ連軍の攻撃は次第  
に熾烈になり、特に北極山と  
七星山の陣地には砲撃と呼応し  
て、一度にわたり激しい攻撃を  
仕掛けたがわが軍の果敢な  
反撃でこれを撃退した。

★連隊長からは、積極的な戦闘  
を避け専守防衛せよとの命令が  
出されているが、敵の攻撃はま  
すます激しさを増し、それを阻  
止するために第一・五・七・八  
各中隊は本格的な戦闘を強いら  
れ、ここに激しい戦闘に入るこ  
とを余儀なくされたのである。

八月十八日 [晴れ]

わが方の陣地も、いよいよ食  
糧が底をついてきたようだ。傷  
ついた軍馬は食用にしてもよい  
との指示が連隊本部から出たら  
しい。古屯が敵に押さえられて

模様である。

私と青木上等兵、それに久保  
田上等兵の三人に、炊事係から  
最前線で戦っている各中隊の仲  
間に、おにぎりを届けてほしい  
という要望があった。恐らく誰  
もが昨日から何も食べずに戦つ  
ているのではないかと思い、早  
速準備にかかりた。

何とか米を集め、ようやく卵  
大のおにぎりにゴマをまぶした  
ものを百個程作つたが、これが  
炊事係としては精一杯のもので  
あつた。木製の桶に入れ、三人  
でこれをぶら下げて山を下つた  
が、困つたことに三人とも八方  
山は初めてであり、味方の陣地  
がどこにあるのか皆目見当がつ  
かない。何しろ軍道から一步で  
もそれると、そこはうつそうと  
した原始林である。コンパスを  
持つていないので原始林の中に  
深入りすると方角が分らなくな  
り、出られなくなってしまうか  
も知れない。あちこちで銃声砲  
声はするが森林にこだましてさ  
っぱり方角が分からない。わが  
連隊は今や完全に敵に包囲され  
ている状態なので、いつ敵と出

合うかもしない。自分達の持  
つている剣付き鉄砲では、ソ連  
軍の自動小銃にはとてもじやな  
いが対抗できない。あつとい  
間に敵の銃口の餌食にされてしま  
うだけだ。

さんざん探して時間も大分経  
つたので、「仕方ない」と、あ  
きらめて帰ろうということにな  
つた。卵大のおにぎりだが、せ  
めて一個でも戦つて戦友達  
に食べてもらひたかつたが、残  
念ながら引き上げた。

連隊長は、戦闘によつて各中  
隊の戦死傷者の増大を懸念し  
つあつたが、終戦を師団命令で  
知り、独断でソ連軍と停戦交渉  
をすることを決断し軍使をソ連  
軍に派遣することにした。

連隊長からは和平の大詔喚發  
を伝え、今後の輕率妄動を慎む  
よう各隊に通達したが第一線の  
陣地までは徹底されていかなか  
つたようだ。

(停戦後、最前線で戦つていた  
各隊の戦友に聞いてみたが、そ  
んな話は聞いていないという兵  
隊が大勢いた)

十日五月節 新地町青山裁縫店

## 明治時代の写真奇譚



内音楽隊員一同』 写真・アコ  
デオンを持つていて左側が先代の  
仲谷清次郎さんとのことです。

青山裁縫店という名前は記録  
にありませんし、音楽隊があつた  
などとは全く意外でした。撮影  
した場所は、どうやら写真館内  
のスタジオのようです。どうもあ  
りがとうございました。

土地の旧家からは、家人も知  
らないような珍しいものが時折  
出てきて、驚いたり、ビックリす  
ることあります。

先日も入船町の仲谷  
知枝子さんから、家の  
中を片付けていてヒヨツ  
コリ出ってきたという写  
真をいただきました。

昔どいつも明治にな  
ると、写真は当時の最  
先端をいく技術でした  
し、そのプロが写したも  
のですからピントも鮮  
明で、一時期流行した  
セピア色の仕上げもき  
ちつとしていて、保存の  
状態も良く、また、裏  
面には撮影年月日、写  
真の説明があつて、得難  
い貴重な資料です。



### ◆近江愛子さん

がよくされたのですねえ。

『戦禍の中をくぐり抜けて』  
人の一生の運命を感じました。

お姉さんの出産、その隣の人との  
結婚、徳島から古平に行く運命

「嫁に行つたら主人の帰つて来る  
のを待ちなさい」  
のお父さんの気持ち。遠い北海  
道といえば、今では遠い外国に行  
つたようなものです。

ご主人がシベリアから帰つて來  
られたのよかつたですね。  
天命・運命つて本当にあるん  
ですねえ。

### ◆中村フミさん

『女子勤労挺身隊員として』

確かに、私の生きた時・私の歩  
んだ道で、感動しました。

文中にも、「海が真っ白くなつて  
見えた」とあるように、本当に練  
なあとと思いました。

『せたかむい』を読まれて、いろいろ意見やご感想を寄せて  
ください方がおられて、大変ありがとうございました。  
この度も大阪府にお住まいの中島季和さんが、高野名正治さんを通じて寄せられたものを紹介いたします。

ひとりで、上野駅からふるさ  
とまで帰られたときは、どんな  
気持ちだったでしょうねえ。お元  
気そうでなによりります。

本間ゆうじさん ひとには親  
切にしてあげるものですねえ。私  
まで、おいしいお雑煮をこちらそ  
になつた気分の文章です。

### ◆梅野モン『手紙』

明治末——古平に嫁いで来て、当  
時の古平のことがよくわかりま  
した。

「酒を飲むときは、先ず箸の先に  
酒をつけ四方にります。」は、  
現代のモンゴルの遊牧民もテレビ  
で見ましたが、同じことをしてい  
ますね。

義経に捧げるを読んで、やっぱ  
り義経は北海道に渡つていたんだ  
なあとと思いました。

# 古市

## 乗合自動車が走る

昨年、①山口さんの土蔵が解体されて、調度品やいろいろな文書類が寄贈され、その整理や分類保存の作業を進めてきたが、中から余市～古平間乗合自動車の

時間表が出てきた。今までも運行時間などおおよそはわかつてい

たが、一枚の時間表が出てきたことではつきりした。

初めて運行されたのは昭和三

年五月一六日で、余市駅前か

ら新地町までの区間を五人

乗り幌付きのフォード車が

走り、当初は一日一往復であ

つたが、物珍しさもあってか、

いつも満員の大盛況であつ

たという。そうゆう状況であ

つたので、時間表も九月一

〇日改正され五往復となつ

たようである。

始発の余市駅前から新地

町までは三〇キロトキ余り、海

上だと余市河口に近い茂入

の発着場まで約一三キロ

で、定期船は早くか

ら運航されていて料金は七

〇銭であったが、自動車は一

円七〇銭と船の一・五倍とい

う高額であった。当時の物価

厘五毛で、余市～古平間では四三  
銭余りにしかならない。

当時は道内の道路は充分に整備されていなかつたし、余市山道は道幅も狭く、一年峠と言われた曲折の多い道路であり、まさに陸の孤島であつたから、町を自動車が走ると、子供達は排気ガスの匂いをかぎながら追いかけた。

大正一五年の統計によると、自動車一台当たり（乗用・貨物車合計）の人口はアメリカでは六人、日本は一八〇九人という時代でもあつた。

動車一台当たり（乗用・貨物車合計）の人口はアメリカでは六人、日本

は一八〇九人と

いう時代でもあ

つた。

と比較する  
と約一万倍  
になつてい  
るから、単純  
計算で一七、  
〇〇〇円？

現在のバス  
料金の約三  
〇倍といふ  
ことになる。

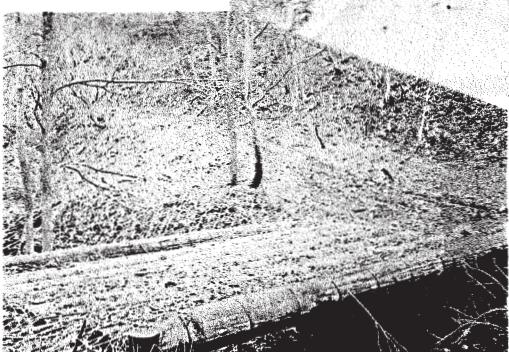
当然のこと  
ながら利用していたのは、一般に

大宅（おおやけ・古平ではおおやけ）といわれる漁場や大店（おおだな）の人達であつたろう。

ちなみに鐵道料金は、八〇キロ以下だと一キロにつき一銭五



沖町～豊浜間の山道  
↓ 沖町側の登り口附近



# セタカムイ岩

## を見続けて

近江愛子

前の「せたかむい」に、満州にて引き揚げてきた頃のことを書きました、「満州にいた」とあるの?と、人に聞かれることがあります。その度にその頃のこと�이思ひ出されます。

主人の故郷である沖村に引き揚げてきたのは、戦後間もない昭和二年の秋で、私が二十六歳のとき

でした。あれから今年でちょうど六〇年がたち、私も八五歳になりました。本当に月日の過ぎるのは早いものです。

当時余市から中央バスが通っていました。一日に一、二回も通つていてでしょうか。まだ山道でしたから、沖村からでも一時間以上かかるて余市へ行つてたようです。

沖村へ引き揚げて来た当時は、主人はシベリアへ抑留されていましたから、見知らぬ土地で荒々しい海大きな岩を見て、どうとう北

の大地、北海道へ来てしまったのかと思いました。  
セタカムイ岩の伝説も知りました。あの岩は漁に出た主人を待つてゐる犬の姿とか、義経を舞つてゐる人の姿とか言われていますが、毎日のように主人を待つてゐる私の気持ちを代弁しているようです。

昔の練漁の頃は、セタカムイ岩の低くなっているところにロープを下げる、それを伝つて反対側の浜に下りたと聞いています。  
あのセタカムイ岩を見続けて六〇年にもなりますが、その間、いろんなことがありました。沖町の戸数も今は三〇戸ほどになり、住む人も五〇人余りとずいぶん

あんまりくよくよしないで、元気でがんばつているところを、セタカムイはきっと見ていてくれることであります。

しうう。

× × ×

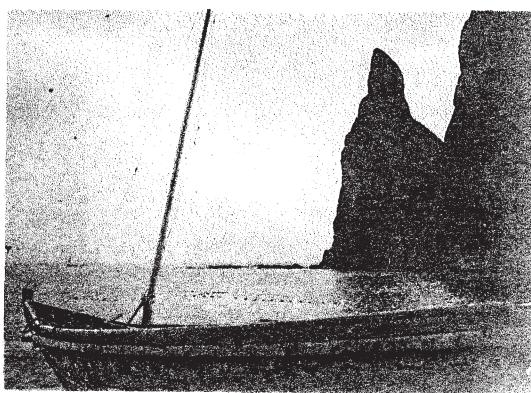
来ぬ人を待ち続けてる

セタカムイ

波ざわにカモメ飛び交い  
セタカムイ

### 編集雑記

▽七月も過ぎたといふのに、暑さもさほど感じないまま暦を見ると『立秋』とあります。季節の変化を表す。実際はこれからが暑い時期なのでしょうが、北海道では秋の前触れというのが実感です。心なしか夜などは肌寒さを覚えます。



→ 魚漁の賑わいも去つて、静かな浜のひととき(昭和初期)

▽夏はやはり海を訪れる人も増えてが、いろいろと交信があります。札幌のある詩吟の会からは先に石碑の冊子を送つたと、一三日(日)バスで古平に立ち寄り、石碑の前で朗詠したいといふことでした。また、小樽のある女性からは「そば喰い地蔵」のお参りをしたいとのことで、参詣の日も近かつたので早速紹介しました。

▽禅源寺の五百羅漢も団体で訪れる人が多いようで、一六日には旭川からという四〇人ほどが観覧に来られ、往時をしのばせる寺院建築にも驚いていました。今はどこでも宣伝につとめ立派なパンフを作つてますが、古平町では、ちょっと現在のところ品切れが続いていて、手製の白黒印刷で間に合わせ、その度に、もうぱら繊細財政ぶりをアピールしています。

経  
教

## 古平町岬短歌会

俳  
句

## 古平俳句会

遠き日に師の作りましし鎮魂歌思ひ出てうたふゆく雲見つ

池田テル

杖なくば如何に登らむお山かな静寂なりし細き坂道

金子寿子

深緑のそよ風搖すり鳥の声佇ずむ空に雲一つ無く

坂本信子

未枯れたる笹原の間行<sup>かん</sup>き行くに岬は女人禁制といふ

鈴木時子

海水も豪雪の傷ひきずりしか浜の活氣も漁獲も減りて

田中香苗

雨もよふ朝のじじまをうぐひすの笛鳴く声を聞きつつ草刈る

丹後初江

柳芽吹く大川端にキジバトとうぐひす鳴くに暫し佇む

寺田清治

夫の歩幅にあわせて歩む散歩道風あたたかくたんぽぽ咲けり

東美知

青空に白雲の浮きせたかむい岩海に影落すその影揺れて

堀典子

茄子の花実になるまでの日数よむ

斎藤波留

久々に手にせし古書の背なの徵

山口悦子

馬小屋の裸電気に縋る蠅

越野敏雄

温泉宿出て夏潮の香を思ひきり

大和田絵伊

新茶汲み友と句話し昼下がり

高橋重子

開け放し窓に川風夏座敷

仲谷比呂古

一湾に影預ける夏木立

室谷弘子

石楠花の露に集まる夏の蝉

外山俊久

海に出て色を増したる青嵐

渡辺嘉之

潮騒の音静かかな夏の夜

堀典子

夏霧の岬の絶壁沈めたり

本間寿昭

岳遠くおきたる卯波穩やかに

越野清治

北海道新聞『読者の声』に入選

## 地域に活動が浸透

### グループホーム

玉谷美都子

知的なハンディを持つている方たちのグループホームに通い始めて九年になりました。地域にはいくつかの寮がありますが、私がお世話をしている寮では、四人の女性が共同生活をしながら職場に通っています。中には食事の支度が苦手の人もいましたが、今は一日の流れも良くなりました。私自身、寮の皆さんに教えられることもしばしばです。

ご近所の方たちは温かい目で見守ってくださり、時には花や野菜を届けてくださいます。九年前とは随分変わりました。まさに、ノーマライゼーションが地域に浸透してきています。市街地や丘の上にある施設や寮には、みんなに見守られてたくさん仲間が暮らしています。

寮の皆さん、私に生きがい与えてくれて、ありがとうございます。

積丹散策

瀧内優子

廃屋の番屋の入口の化粧板むかしの舟の唐草模様絶壁にエゾカンゾウの咲き乱れ海へと続く島武意海岸屏風岩の一面しろく海鳥の糞なるや積丹ブルーの海に映えて

幌武意の入江に建てる別荘は威風堂々と見下ろす如く居並ぶはログハウスの数多あり札幌の職去りし釣り人と

せたかむいの一〇〇号を記念して、五月号を三二ページに増ページしましたところ、幸いに多くの方から「好評をいただいて、いつもより一〇〇部多い六五〇部印刷したのですが早々に全部出てしましました。

雑誌も新年号となると普段より豪華になりますので、

内容・字数は自由とし、皆さんからの原稿をお待ちしております。

義経を恋し慕へて情念の伝へられしや神威の岩は

1月号

原稿募集

1月号も増ページの予定です。

それで、皆さんからの原稿を広く募集し、読んで楽しく、充実したものをお届けしたいと思つております。

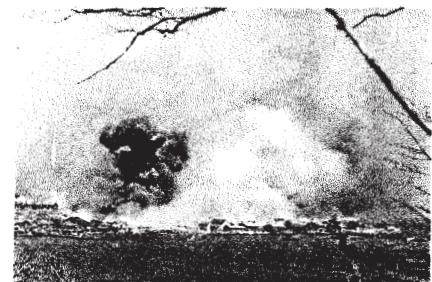
チャレンカの小径の片平にエゾカンゾウ蓬の中に咲き初めます水無月の草生の中に飯をはむ風はおだしく背中ぬくとし

神威岬関所もどき掲げたる女人禁制の地神威岬と

# 古平町史年表

昭和24年(1949)

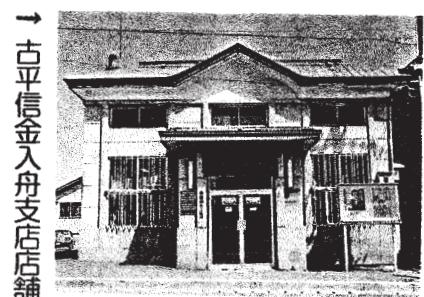
- ▲古平町道路愛護組合が設立され、組合長に大澤町長が就任する
- ▲古平漁港災害復旧工事が完了する
- ▲古平小学校の新しい校歌が制定され、以前の校歌は廃止される。作詞・工藤富次郎 作曲・広谷成男
- ▲機関故障で航行不能となった第三住吉丸を曳航救助に当った勇松丸外が、日本水難救済会会长から表彰される
- ★新地町から出火した火災は720戸余りを全焼、死者2名をだす大惨事となる。出火原因は不明とされた
- ▲古平町役場内に古平町火災復興対策本部を設置する
- ▲新地分校が大火による被災者の収容所となつたため児童は本校で授業を行う。(11月20日まで)
- ▲船入潤の拡張について農林省へ請願書を提出する
- ▲田中敏文知事が火災状況視察に来町する
- ▲災害復旧用材として立ち木の払下げを受ける
- ▲稻倉石小学校が開校以来初めての修学旅行を行う
- ▲古平漁業協同組合設立総会が開かれる
- ★第3回町民運動会が中島グランドで開かれる
- ▲古平漁業協同組合が出荷機關として認可される
- ▲罹災復旧住宅建築資金貸付け条例が決まる
- ▲蓮実豊光が二階建て3戸1棟を町に寄付する
- ★古平信用金庫入船支店が新築落成する
- ▲古平漁業協同組合肝油工場が完成する
- ★丸山町の町営住宅50戸が完成する
- ▲小樽裁判所古平出張所が、札幌法務局古平出張所と改称する
- ▲古平漁業協同組合の肥料工場が完成する
- ▲農林省函館統計事務所古平出張所が設置される
- ▲生産者の現在高等調査の標本農家として、小野寺巳代治が選ばれる
- ▲丸山町に古平授産所が設置される
- ★開発道路として当丸殖民地線が神恵内側から着工される



↑燃えさかる西部地区の大火灾



↑町民運動会で浜五町内会の仮装行列



↑完成した50戸の町営住宅



当丸峠附近の道路建設 →